# ［発掘余話］金沢城跡五十間長屋出土「鍬始」刻石

## その２　～ジンザ登場～

北野　博司

### ８　加賀藩の石垣普請

石垣普請にあたる人たちが属する組織と藩の機構について触れておきたい。

**藩主－年寄－普請奉行－穴生**

石垣普請を担当するのは「普請奉行」（役所名は「普請会所」）であり、その下に「穴生」があった。穴生は江戸時代中後期には定員４名前後で構成され、後藤家、奥（穴太）家といった家柄の者が代々これを勤めた。「穴生」は石垣築成技術をもって仕える職であり、いわば技官である。普請奉行の上には「年寄」衆（本多、村井、前田などの八家）がおり、石垣普請のことも彼らが決裁した。

「穴生」は石垣普請に際して、工事仕様書及び費用見積書を作成し、材料調達や施工管理、労務管理など一切をとり仕切る。普請がない場合でも穴生役所へ出勤し、毎朝、御扶持人石切等と城内の石垣などを点検して回るのも勤めであった。

**穴生－御扶持人石切－二十人石切－杖突－役小者**

穴生の下には「御扶持人石切」（扶持を受けている石切、足軽と同列）－「二十人石切」－「杖突」－「役小者」らが連なる。石切り・石引きの際には、他にも手木之者（手木足軽）や日用之者（日雇い人足）などが多数仕事に携わった。石切り、石積みの実際の現場では穴生の指図を受けた御扶持人石切が指揮し、二十人石切、役小者が作業にあたった。新丸の西側にあった普請会所内には穴生役所があり、「穴生」「御扶持人石切」が詰めていた（第２図１）。

### ９　後藤彦三郎和睦

加賀藩の穴生として最も有名なのは後藤家第６代「後藤彦三郎」（宝暦五～文政十一）であろう。彼は没落著しい後藤家（５代用助の娘）に婿入りし、一代で家を復興した。俸禄は切米50俵から始まって最終的にはライバルの奥（穴太）家を追い越し、知行100石へと躍進したのである。もともと石垣について素人の彼はお家大事の一念で勉強に励み、陰陽五行思想などにより石垣構築理論を体系化し、口伝、一子相伝の世界を秘伝書としてまとめた（北垣聰一郎『石垣普請』）。

後藤家文書は由緒書・相続・俸禄・縁組・遺書といった「家」に関するものから、加賀藩の石垣普請の歴史や石垣構築理論をまとめた秘伝書類、石垣積様秘伝絵図等からなっている。北垣氏によれば、秘伝書類のうち彦三郎署名・筆跡のものが82%、息子の小十郎書写のものと合わせると95%が彼らの手によるものという（北垣前掲書）。希代の努力家、理論家であり、記録魔でもあった彦三郎。今、彼の残した文書が城石垣に携わる我々（私）を十二分に楽し（苦し）ませくれる。いずれにしても、これらの文書・絵図類は我が国の土木技術史、加賀藩の藩政史を考える上で第一級の史料である。

付言しておくが、橋爪門続櫓台石垣（切り込みハギ）はカミソリの刃一枚も入らないと言われるほど精緻に積まれた石垣であり、直接は穴生後藤小十郎（徹丞）が担当したものとはいえ、同時に穴生でもあった実父彦三郎の作品とも言える。細工物を得意とした後藤彦三郎父子、生涯の最高傑作が橋爪門続櫓台石垣なのだ。

### 10　五十間長屋台を修築したのは誰だ？

後藤家文書を見ていくうちに、自然と頭に浮かんできたのは「宝暦十三年に五十間長屋を修築した

穴生は誰か」という疑問である。おそらくその人物が「鍬始」刻石を作り、宝暦九年の大火復興を印象付ける盛大な鍬初めのセレモニーを挙行した張本人に違いない。

まず、宝暦十三年に穴生を勤めた人物を探してみた。幸い、家柄の後藤・奥家は先祖由緒が整っており、すぐに分かった。後藤家は４代目杢兵衛友和、奥家は６代目奥源右衛門茂勝である。

４代目後藤杢兵衛は穴生の中でも最も多くの石垣修築工事に携わった人物であるが、宝暦七年の勤めを最後とし、宝暦十三年の翌年明和元年八月に74歳で死亡している。その年二月に、もはや老年で御用が勤められず、息子の用助に代役を願い出たばかりであった。

奥家では源右衛門が当年68歳、すでに年齢はピークを過ぎていた。宝暦五年に７代目源左衛門が石垣普請見習となり、後藤家同様、世代交代の最中であった。

いずれの穴生が五十間長屋を修築したのか。はたまた第三の人物か。

## 11　鍬初めとはなんぞや　～宝暦十三年六月二十五日朝の出来事～

宝暦十三年の穴生方の探索と同時に、鍬初めのセレモニーについても調べが進められた。後藤彦三郎が書き表した秘伝書「唯子一人伝」には、鍬初めの由来及びその儀式作法等が詳しく述べられている（第３図）。また「御鍬初式之図」「御鍬初略記」といった絵図の類も残されている（第２図２～４）。

「鍬初式」は、初めて石垣を築いたり、修築で根石（最下段の石）を取り替える場合に行う。吉日、吉刻、吉方を選び、角石を所定の場所へ引き寄せる。祭壇を設け、神酒・するめ等を供え、松の枝を敷き、九字を切る。松の枝は根石の下に敷く場合や角石の後ろに敷く場合があり、普請の大小によって松の枝の本数が５本、７本、９本であったり、敷き方にもそれぞれ作法があった。この陰陽思想に基づく儀式を執り仕切るのも穴生の仕事であった。

ある日、現場で「鍬始」刻石が出土した五十間長屋東北角の真下、堀底の根石のあたりにふと目をやった（写真２）。

あっ!! どこかで見た風景・・・・・。脳裏に浮かんだのは「御鍬初略記」の図である（第２図４）。そこには角石に似た切石が不自然に横たわっているではないか。他の隅角部の根石付近にこんな石はない。

宝暦十三癸未年六月二十五日、ぬけるような晴天の朝（午前六時～十時）、木具に設えられた神饌、角石の脇に並べられた普請道具を前に、縁（へり）取りに座した穴生某はじめ御扶持人石切らは、南に向かいまさに盛大な鍬初式を挙行しようとしていた。「宝暦の御焼失」を払拭し、加賀藩復興を告げる特別な意味を持つ「鍬初式」であった。五十間長屋の丑寅の方角－鬼門にあたる場所で、「臨兵闘者皆陣列在前」怨敵悪鬼退散、石垣の長久を祈って九字が切られた。

穴生某はすでにこの時、鍬初めの記念の石を石垣出来（しゅったい）後に、最上部に埋め置くことを決めていた。それは全く異例のことであった。

## 12　ジンザ静かに登場

「唯子一人伝」には後藤彦三郎（せがれ小十郎）が関わった鍬初めが出てくる。文化五年の橋爪門続櫓修築、寛政十二年の大手石垣修築、文化七（十三）年の本丸高石垣修築である。根石を取り替えない場合でも鍬初めは行われたようであるが、彦三郎は普請の大小によって儀式の軽重を考えるべきであるとしている。

加賀藩の鍬初めは、小松に隠居中の三代利常自らが出向いた明暦三年（1657）の江戸城天守台普請にかかるものが有名であり、あまりの派手な演出に江戸中の貴賤老若が見物した、と記録にある。

「唯子一人伝」を読み進むと鍬初めの記載の後段に「宝暦年中に正木故甚左衛門なる人物が大がか

りな鍬初めを行った」と書いてある。「正木甚左衛門」聞いたこともない名前である。果たして穴生なのか。正木甚左衛門－人呼んでジンザ。出会いは静かであった。

## 13　「鍬初め」を訪ねて行脚する

宇佐美孝氏（金沢市立玉川図書館近世資料室）からは、明治三年の「先祖由緒并一類附帳」の正木家の一つに石切関係の家があること、東四柳史明氏（当時加能史料編纂室）からは、「唯子一人伝」中にある甚左衛門が「石居の規式」を習った「泰（たい）ノ神主」とは、田井（たい）天神（椿原天満宮、今は金沢美大前の坂下）の高井氏であること、長谷川孝徳氏（石川県立歴史博物館）からは「御鍬初式之図」の読みとり方等についてそれぞれご教示を賜った。この場を借りて御礼申し上げます。

なお、鍬初めの記念石を作る話は文献には全く出てこないという。建築の手（執）斧初は棟札に記録されるが、石垣に鍬初めの記録を残した例は今のところ全国でもない。この刻石が極めて特殊なものであることが分かる。

## 14　「戸室石引き道」との出会い

記者発表資料作りを始めた頃、市立泉野図書館で『戸室石引き道』（金沢市生活環境部発行、平成７年）なる本があるのを知った。著者は北島俊朗氏。金沢城石垣の石切丁場があった戸室山周辺から城内までの石引き道を現地踏査し、民俗調査や史料調査を踏まえてまとめられた報告書で、藩政時代の「石切り・石引き」だけでなく、近現代まで対象としたたいへんな労作である。

その北島氏がひょっこり金沢城跡の石垣調査を見学においでた。『戸室石引き道』は県教委文化財課や埋文センターになく、発行元にも問い合わせてみたが残部はなかった。そのことを知って北島氏はお手持ちから貴重な一冊をセンターに寄贈してくださることになった。

心待ちにした本が届いた。石切場、石切道具、石の運搬方法、石切の組織や生活などが非常に分かりやすくまとめられている。そして、後半は資料編として近年後藤文庫（金沢市立図書館）におさめられた「戸室山初年号等留帳」「河北郡戸室山開之事等留帳」、また穴生の職務について書かれている「穴生勤方帳」（金沢市穴生氏蔵）などが活字化されている。最後に用語集及び石垣関係の記事を整理した年表が付されており、これも手引きとしてたいへんありがたい。例によって古文書は読めないので、元号と西暦年の対比のために年表をめくる日が続いた。

## 15　ジンザふたたび

ある日、『戸室石引き道』をめくっていると、古文書のページが開いた。ふと目をやると・・・・えっ、我が目を疑った。漢字の海の中に目が一点にくぎ付けにされていく。そこには確かに「穴生正木甚左衛門」と書いてある。心の中に引っかかっていたものがこみ上げてきた。さらにページをめくると「甚左衛門」の名は一つや二つではない。夢中でジンザの名を探す。安永年間（1772～1780）に活躍した穴生のようである。安永といえば宝暦十三年（1763）からさほど遠くない。宝暦十三年、五十間長屋、鍬初め、正木甚左衛門、キーワードが一本の線でつながり始めた。いよいよ面白くなってきた!!

「宝暦十三年の五十間長屋台石垣修築は穴生正木甚左衛門が担当し、盛大な鍬初式を行い、記念の刻石を作り安置した」という仮説がたてられる。

「戸室山初年号等留帳」「河北郡戸室山開之事等留帳」の２冊については次号以降の主題になるのでここでは触れないが、「留帳」らしく後藤彦三郎の石垣普請に対する考え方や性格が非常によく現れている。内容が戸室本山を開いた宝暦五年以降、特に安永期が中心のため、正木甚左衛門の事績が

たくさん取り上げられている。興味深いのはその取り上げ方であり、徹底的に批判の対象としていることである。まるで親の敵(かたき)のように。甚左衛門の名は両文書合わせて39回登場する。非難の文面からは、彦三郎にとって決して相容れないものと一方では自分にないものに対するある種の憧憬とが入り混じった複雑な心境が読みとれる。この文書は、後藤彦三郎著「正木甚左衛門列伝」と呼んでも過言でない。

### 16　石垣解体調査進む　～石垣の修築過程が見えてきた～

史料調査の一方で現場も着実に進行していった。最上面の建物礎石を検出した段階ですでに現石垣台が単一時期のものでないことが予想された。理由は以下の通りである。

（1）石垣立面に見える修築痕（写真２、第１図立面）

（2）五十間長屋台平面に見える修築痕（写真１、第１図平面）

現存する菱櫓台から五十間長屋台、橋爪門続櫓台までの石垣が、現在までに少なくとも２回の修築を受けていることがほぼ確実となってきたのである。そして、境界部の土層の切り合い関係から、菱櫓→五十間長屋→橋爪門続櫓の順が確認された。

これにもう一つ付け加えれば、内堀側（打ち込みハギ）の石積みが五十間長屋台とそれ以外では明らかに違うのである。解体作業は横一列に積まれた（布積み）石を一段ずつはずして行くのであるが、菱櫓、続櫓では石列は上面が水平で歩くのに苦労はない。ところが五十間長屋の石はでこぼこして足を滑らしやすく危険である。要するに谷積み傾向があるのであり、明らかに積み手が違うのである（この違いは解体が進むにつれ多方面で検証できるようになっていく）。

創建時期は不明ながら、文献及び調査成果から五十間長屋台修築が宝暦十三年、橋爪門続櫓台修築が文化五年の年代が与えられることになった。なお、『加賀藩史料』等には天明八年にも橋爪門続櫓台石垣を修理した記録が残っている。少なくとも都合４時期の普請の手が加わっていたことが判明してきたのである（その後、菱櫓台が寛文8年(1668)に修築された可能性が浮上してきた）。

### 17　ジンザ眠りにつく　　～記者発表～

いよいよ、記者発表資料のアウトラインが固まってきた。一点は「鍬始」刻石の発見、もう一点は石垣台の修築過程が発掘調査と文献で明らかとなってきたことである。

しかしここで大きな問題に行き当たった。「正木甚左衛門」をどうするかである。先の仮説を検証していくためには、後藤家文書を読破して宝暦十三年の五十間長屋にジンザが関わった記録をもっと探さねばならない。また石垣解体調査の中でも、各地区の石積みの特徴を詳しく分析せねばその特質は明らかにならない。ひょっとして、石垣の中から別の穴生の名前を書いた刻石が出土するかも知れない、等々調査員間で話し合った結果、記者発表ではあえてジンザに触れることはやめておこうということになった。ただし、発表資料にはジンザが宝暦年間に鍬初めをやったこと、安永年間に穴生であったことが書いてあるので、もし、五十間長屋台修築担当穴生について質問があった場合は、ジンザの存在をにおわす程度にとどめようと決めた。

平成10年12月９日、15:00現場事務所で報道関係者を集めてレクチャーが行われた。発表者は現場主任滝川重徳がつとめた。レクチャーは手はずどおり粛々と進んだ。一部、図面のスケールを間違ったり、刻石を出土地点での撮影に持ち運ぶのが遅れたり、どたばたした点もあったがなんとかやり過ごした。この日、ジンザはマスコミに目を覚まされることなく静かに眠っていた。　　（つづく）

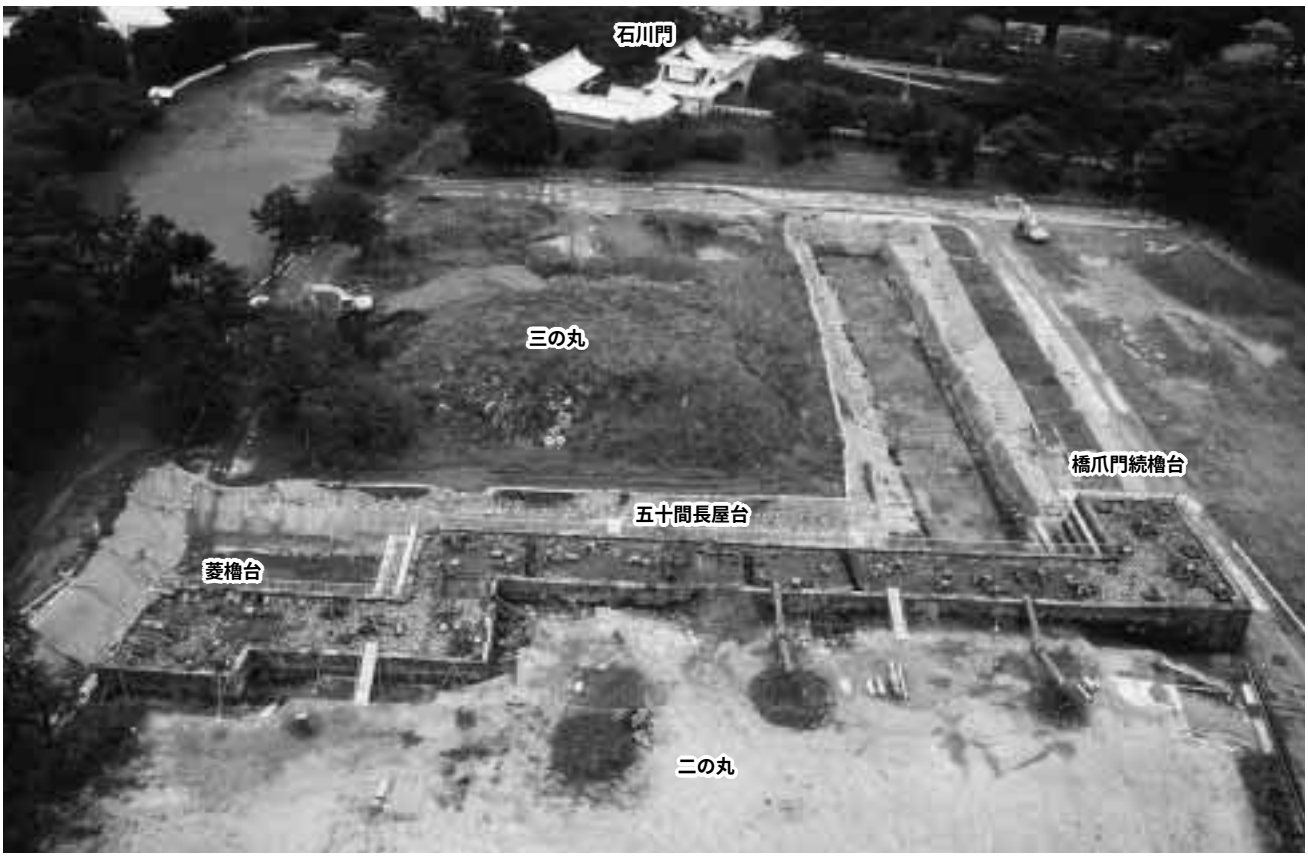
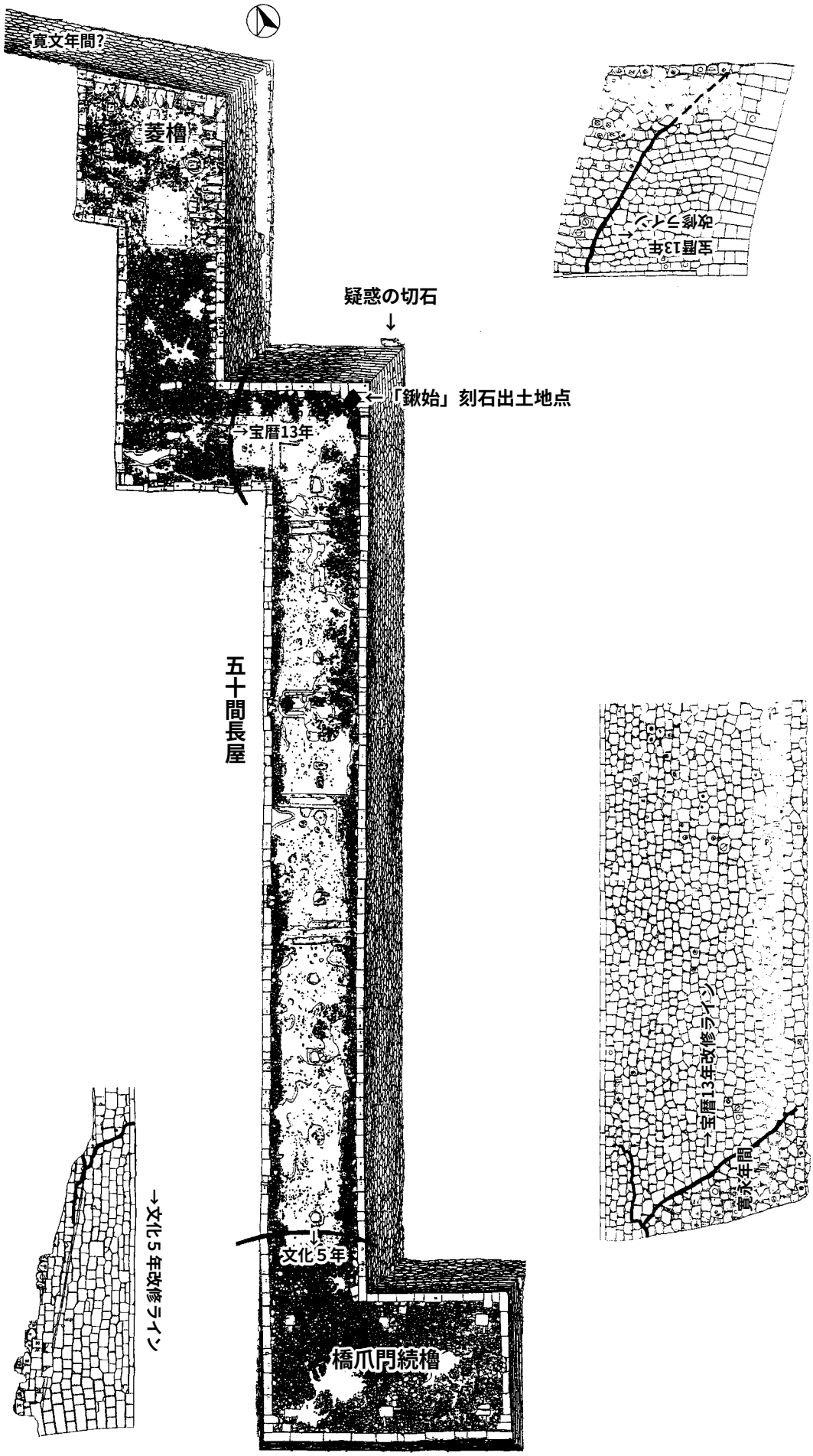
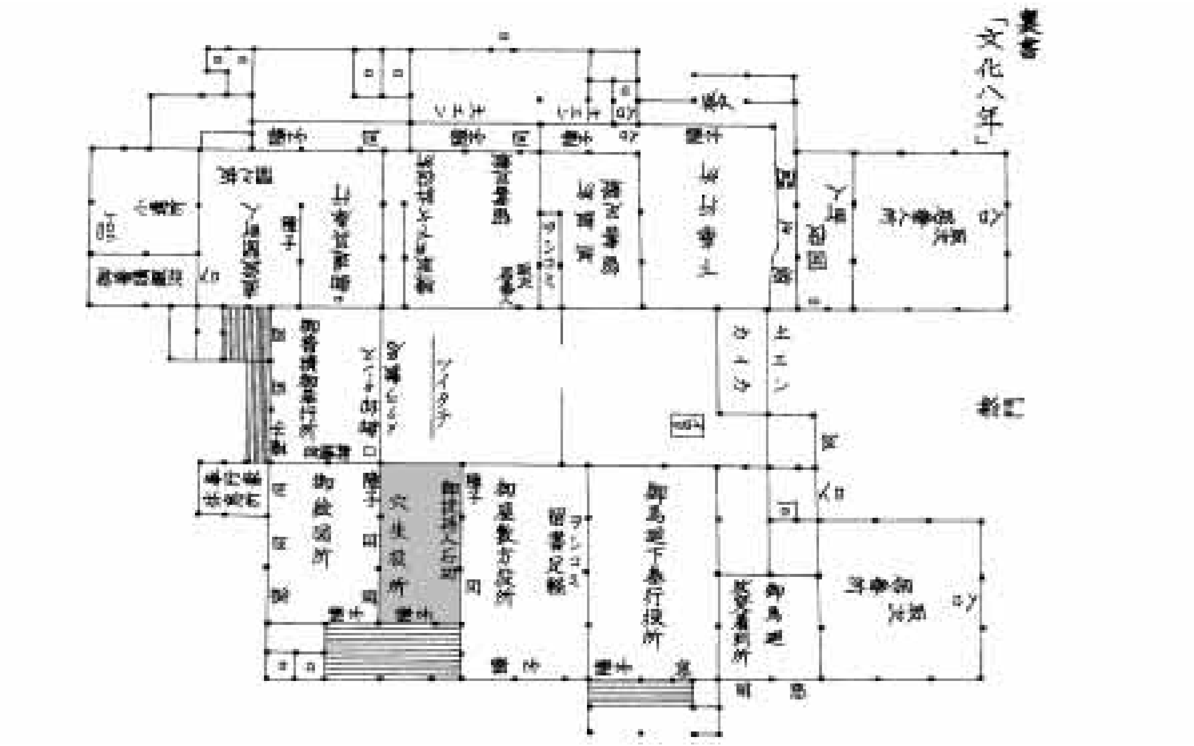



写真１　櫓台・長屋台石垣上面の様子（栗石の広がりに注目）

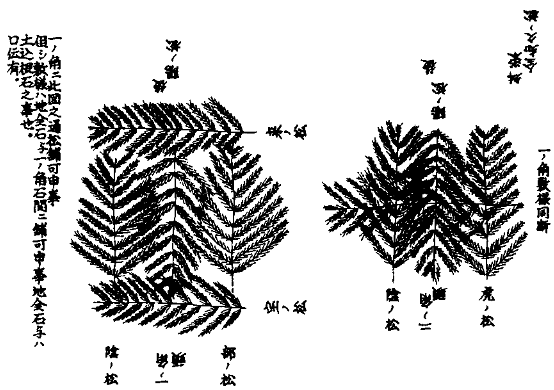
写真２　五十間長屋台北面石垣（宝暦13年の改修ラインが見える）



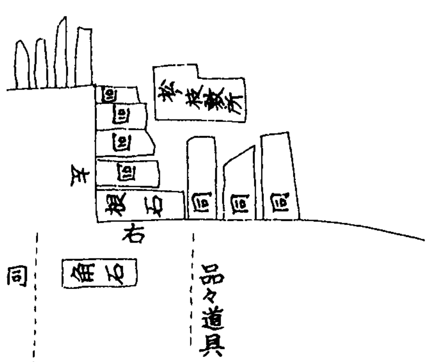

第１図　石垣の修築状況（平面図は1/400、立面図は1/300）



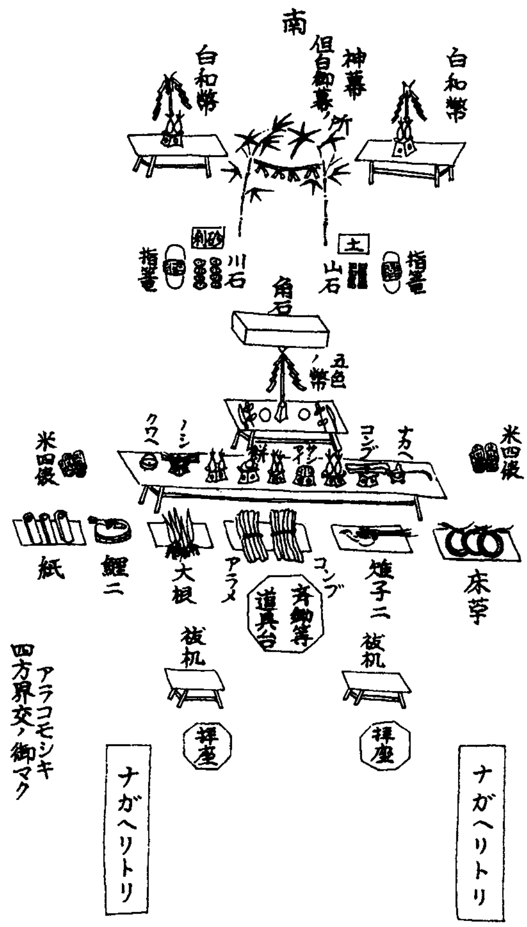

1.穴生役所之図



3.御鍬初式之図（三）




4.御鍬初略記（抜粋）



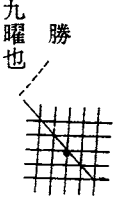

2.御鍬初式之図（二）

第２図　普請会所と鍬初め（後藤文庫　『金沢城郭史料』より）

農ハ国之大本也。依而普譜にも大本之第一之道具ヲ取鍬初と名付。鍬ハ第一番地形根切ニ用る具也。鉄ハ国中之宝也。兵具農具ニ用ヒ、金銀大切にするといへど茂名付候時ハ鉄ハ武家也、金銀は公家と知べし。然者国之宝也。石垣積方野山の名有。野山あればこそ万民何之うれいなく百姓ニ作らせ豊に仕官をする事右鉄ノ徳タルべし。石垣積方も右之心を表シ目出度名目を付る。別書ニ而知べし。

一御石垣根石取除候時者鍬初有べし。神酒ヲそなへ松の枝を敷九字ヲ切事也。是則怨敵悪鬼ヲ防ゲ為御長久を奉祈義也。石垣縄十字之縄根元ニシテ是ニ而も悪気等を防ゲ也。万物十字ノはなれ申事ハなく初リノ根也。一ノ上江一ヲ重スレバ則十ノ字也。世界也。十方也。世界ノ作法極る也。

臨(カ)兵(カ)闘者皆陣烈在前




石垣九字ノ積方別ニ有。

一角石一本石ヲ忌也。必一本石ノ下ニ一石有べし。一ノ文字ハサシシイトよむ也。其外にも忌事有。門台築天間四間ニ二間ハせぬ筈也。四二間といふて甚忌也。ケ様之所あらば尺ヲ付る事也。

一右鍬初当日角石其所江引寄置、木具ニ神酒鯛松之枝居備ル。酒ノ口ノ軽ク蝶花形ヲ付ル。右木具ニ居置松ノ枝ヲ取、其所ニ依而敷方違ふ也。其日ノ吉方に向ヒ松之枝と鯛を敷九字ヲ切拝して終ル。夫5木具を為引賀ヲ敷といへども松迄敷事軽キ本文御普請所江は普請道具鍬玄翁羽釣鑿丸のミ小鎚タ、キノミ曲尺鶴嘴等餝ル也。角石作ラセ申節玄翁七五三ニ為打申也。右終而御当日ハ御丁場相止ルトいへど茂其時之様子次第相止メ申ニ而も有之間敷普請ハ片時茂はやく御成就専要とす。江戸御天守台御鍬初、其時分は右様之義茂無御座、後出来タル事也。穴生装束は替ル事なし。御城中へ出候通、文化五年御鍬初之節ハ、上下着用被仰渡、直ニ御能拝見、頂載物被仰付候。是は後例ニハ不成事。石垣ハ早ク御成就普請之大意也。治世之鍬初は先如此也。木具も略してもよかるべし。御酒と鯛と松ノ枝迄ニ而相済事ニ候。尤吉日を撰べし。寅ノ日ハ大ニ忌也。大手御石垣之節軽ク鍬初仕候。奉行衆へも相達不申軽ク仕候。高御石垣之時者御達ニ而少分拝領物被仰付候。普譜之大小もよるべし。ケ様之儀者其時之撰様次第也。宝暦年中正木故甚左衛門5御達申上被仰付候。御鍬初ハ大キなる事ニ候。五貫目余之御入用相懸り候。泰ノ神主5石居ノ規式ヲ習請、ケ様之書物相伝候段御達申上、甚左衛門江被仰付。甚左衛門壱人江拝領物被仰付。外穴生ハ甚左御門之手伝ニ候哉不相分、甚左衛門来リ御達申上候躰能々承リ申候時成哉〳〵。当時左様之義申出シ候ても家柄之者ニ而もなく取上ハ有之間敷、人々正直之時節故也。是も甚左衛門仕合虚ヲよく実ニ仕成シ候事器量之者ニ候。家柄之者甚左衛門ノ指一本之値もなく残念成事ニ候。御鍬初ニ茂調候ニ付其端々ヲ調置。

**第３図　「唯子一人伝」にみえる鍬初め（後藤文庫　『金沢城郭史料』より　傍線加筆）**